MY VERY FAVORITE

大宮エリーさんによるエッセイの連載がスタート!

ときめく贈りもの。

GIFT.1 しあわせの魔法・手作りモナカ

文 大宮エリー

お菓子はこどものためのものと限ったわけではない。大人にとっては時に、コミュニケーションの手段となる。もしくはご挨拶。もしくは自分をねぎらってくれる存在。お菓子にはきちんと適切な出会い方がある。こどものころに出会ったお菓子で、なんとなくいまいちだったものも、大人になってから、こんな○○なものもあるのか!

　と、本物に出会った感動に胸撃ち抜かれることもある。

　まずは、最中のお話。

　最中ってなんだかめでたいときに食べたくなる。あとは目上の人生の先輩に贈るとか手土産に買う機会が多いのである。そしてそのときに小さいサイズのもので自分のも買っておく。たまに餡子を異様に欲する時があるからだ。鉄分?糖分?すごく疲れたときおいしい緑茶といっしょに、ほっこりしたくなる。もう一つの理由は、贈り物をする際に自分でも食べておくとああ、こういう味なのか!と分かるからだ。喜ばれたとき、こういうのがいいんだな?というリサーチにもなる。以前、大きな最中を買ったことがある。手のひらくらいあるもの。それで、なんだか嬉しくなって買った。ずしりとする餡子の重み。最中を包む包み紙も好きだ。プレゼントの包装紙をあけるような喜びがあるからだ。丁寧に開いて、で、かぶりつく。そのとき、ふと、あれ?と思った。

「思ってたのと違う…」

　私が思う理想の最中は、外がパリッ、なのだ。そして中の餡子が、あまり甘くなく小豆の味わいがきちんとするもの。

　以来、最中はなかなか難しいもの、というカテゴリーに自分の中ではなっていた。これはという有名なものを聞くと、贈るついでに食べてみる。最中食べ活動。でもなかなかしっくりこないのである。おかしいなあ、そもそも私の理想の最中はどこからきているのだろう。小さい頃に食べた最中で、これが好き!というものがあったのだろうか。そんな私に転機が訪れる。近所においしいカステラ屋さんがあり、いつもそこでお土産やら舞台の楽屋差し入れなどを買うのだが、バタバタと用事を済ませるので気づかなかった。が、とあるものにある時気づいたのだ。

「ん?こ、これは…」

　カステラ屋さんのショーケースの一角に、なんと、最中も販売されていたのである。

　しかもすごく小ぶり。500円玉サイズ。特筆すべきはなんと、「手作り」とあるのだ。

　この手作りというのは、食べる人が自分で手作りしなくてはいけないという意味。小さな皮と餡が別々になっていて、自分で餡をいれ、挟んで食べる。早速試しに買ってみた。

「う、うまい!」

　小ぶりだからパクパク食べられる。

「これだ!」

　私が探していた理想の最中に出会ったのだ。自分で作るから外パリッ、中しっとり。しかも餡は、ごわごわではなくしっとり。小豆の味わいがきちんとあるのだけれど、小豆の物質感は私にとっては不要なのである。

　こどものころ、もしかしたら、カステラと一緒にどこかで食べさせてもらったのだろうか。

　それとも自分の単なる好みなのだろうか。最近、地方の著名な陶芸家の先生で、とてもグルメな方に、早速その最中を送った。手紙にこう添えた。「少し手間ですが、お仕事の合間に、童心にかえって餡子を挟み、あそびながら食べてください」

　先生が、楽しく奥様と、パリパリの最中を作って食べてくれたらいいなあ。

おおみや・えりー
作家・画家。
舞台やドラマ、エッセイなど幅広い分野で作品を発表。主な著書に『生きるコント』(文春文庫)。クリエイティブの学校「エリー学園」「こどもエリー学園」主宰。100枚の空の絵を描いた「たびするきもち」展がJAL SKY MUSEUMにて1月31日まで開催中。